みそつかす

幸田文著

昭和二十六年四月十日　第一刷發行
昭和二十七年四月三十日　第四刷發行

みそつかす
定價百六拾圓

著者　幸田文

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
發行者　岩波雄二郎

東京都青梅市根ケ布三八五番地
印刷者　山田一雄

發行所　東京都千代田區神田一ツ橋二ノ三　株式會社　岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

製本・刷印堂化大社會式株

幸田文

みそつかす

岩波書店

目次

はじまり　一
はゝ　一四
でみづ　三
おばあさん　三九
最初の教育　六二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あね　七三
父の再婚　八〇
おくさま　八八
お客　九五
おねしよ　九九
なのはな　一〇五
たてまし　一〇七

柳川さん　一二四
酒客　一二九
湯の洗禮　一三三
かたな　一三一
お產　一四〇
鷹　一四四
リボン　一四六

ヂフテリヤ　一五一
花見さん　一五七
無　一六一
ぬすみぎゝ　一六四
口上　一六八
きず　一七三
ゆかた　一七八

二人の先生　一九五
卒業　二〇一
みそつかすのことば　二〇五

みそつかす

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はじまり

明治三十七年九月一日。暴風雨(あらし)のさなかに私が生れたといふ。命名の書にはたゞ文とだけ。第一子は母體を離れぬうちに空しくなつたが、これは男子であつたさうな。位牌には夢幻童子とあつた。第二子は女、歌といふ。父は三子に男を欲してゐたといふ。そこへ私が出て來たのである。

恵まれた子を喜ばぬといふことは勿論あり得ないけれど、男子を待ち望んだ心には當外れの淋しさがあつたのだらう。産褥の枕もとから立ちあがる父と入れかはりに、葛湯をすすめに行つた下婢おもとは、母がほろ〳〵と涙を流してゐるのを見、「女だつて好い兒になれ、女だつて好い兒になれ」とくりかへしてゐるのを聞いたといふ。お産に疲れて敏感になつた女心が、すぐに父の張りあひない淋しさを映して、續けて女の子を二人産んだといふ理由のない間のわるさに涙を落したものでもあらうか、あはれに思ひやられる。

長女は綺麗な子であつた。ふつさりした髪と弧を描く眉、黒い瞳、鼻と直角についた唇は笑ふと特徴あるかしぎかたをする。生れたばかりのときは誰もさう美しいものではないが、私はことさらに美しくなかつたさうである。赤茶けたうす色の髪は薄く、眼窩大きく寸づまりの鼻に、泣きわめく口は燕のやうであつたといはれる。美しいものを喜ぶ父がこの芳しからぬ子を見て、あるいは何か母に云つたかともおもへる。「いらないやつが生れて來た」と父がつぶやいたといふことを、やはりこのおもとから聞かされ、物心ついてから何十年の長い歳月を私はこのことばに閉ぢこめられ、寂寥と不平とひがみを道づれにした。臨終を數日後にして父は、輝きわたつて私を照らした。皎々たる光を浴びて呪ふべきこの道づれはあとなく影を消し、陽のなかに遊ぶ裸身(はだかみ)のをさな兒のやうに私ははじめて歡喜し、圓滿であつた。姉や弟とともに私もまた愛子であつたのだ。この幸福な確信を形見に殘してくれて、父は世を去つてしまつた。かたくなだつた私は、父の生命とひきかへのやうにして、やうやうすべての子は父の愛子であるといふことがわかつたのであつた。

私の生れたときに父は三十八歳、すでに一女を得てゐる。おのれの氣魄を次代に貫きつ

がせたいその跡取り息子を望み求めたのは、世の人情のあたりまへである。何の業どの道を行くものにもせよ、おのれの筋金を傳へて世に問ふものをもつた、毅然たる悴の姿を描いたのは無理からぬ壯年の思ひであらうのに、與へられたものは姉に劣る數等の私であつたとしたら、いりもしないやつ云々のことばが駟もまた及ばぬ早さでひとの耳に駈けつけたとしても、これもまた無理ならぬ人情のゆくへである。人情の流れは、懷に抱けば舟もつなぎ波風も避ける。さからつた私は櫓にも骨折り櫂にも息づいたが、いまはおだやかにこのことを思つてみてゐる。壯年三十八歳の元氣に溢れた父と、しかと云つたか云はなかつたかわかりもしないこのことばとを、あたゝかにわが懷に抱けばおのづから湧くものは微笑である。この私は裸で生れ落ちるが否や、あれほどの、父ほどの男を忌々しがらせたではないか。なんと生意氣な、そして滑稽な文子。

姉は優にして父の愛を得、私は醜にして母のあはれみを蒙り、露伴家は進行する。三年して明治四十年、初午の太鼓のどかな春の晝、弟が生れた。父は勇みたつて祝杯を擧げたといふし、母はほつとしたと人に語つたといふ。成豐、呼び名は一郎。命名の書には出典

やら何やらがごた〳〵書きつけてあつた。待つものを得てきほつた父の心が讀める。早春の陽ざしは障子に柔かだつたらう、梅が匂つてゐたらう。遠くにゆるやかな太鼓が聞える。杯を擧げて父は快く醉うてゐる。別室の母は滿足と疲勞にうつら〳〵してゐたらう。この光景をおもふと、悲しいほどにもめでたい。多分、父の家庭の幸福は絶頂だつたと考へられる。

は

七歳。母の死をもつて私の記憶は突如として、しかも鮮かにはじまる。ある午後、私達が小石川のおばあさんと呼んでゐる父の母と、母の姉山室久子とが、申しあはせでもしてあつたやうに相ついで來あはせ、臥てゐる母の處へ代りばんこに出たりはひつたりした。時たまにしか來ない人であつたから物珍しかつた。お久伯母さんは手提袋から蜜柑を出して、私と弟に一ツづゝくれ、自分は煙管を取りだして吸ひつけた。おばあさんはなんとなく苦々しげにしてゐるので、蜜柑は貰つたものゝ皮も剝きかねて立ちあがると、弟もつい

て來た。きやうだいは二人ながらに、この人達にちつとも親しみをもたなかつた。

おばあさんは顏面神經痛で、しよつ中顏半分がぴく〳〵引きつれてゐて、こはかつた。そのうへ、しやんとすわつて人を寄せつけないやうな威嚴を示してゐたし、父ですらが言語・態度ともに第一公式を以てしてゐたから、云ひやうのない氣ぶつせいさであつた。激しい物云ひでもなく、むしろ穩かな樣子であつたのに妙に一種の戰慄を受ける、ゆめにもあまつたれられるおばあさんではなかつた。容貌は美しくない。額の皺、大きな口、小さい切長な眼はきらり〳〵とよく光つた。郡司伯父・父・延子叔母はあきらかに母親似である。

お久伯母さんは母のすぐ上の姉である。顏は母と似てゐない。おでこで大きな眼がきよろきよろし、唇は紫色でとんがつてゐた。痩せた骨の上に皮がゆとりなく引つ張れてかてかし、耳が薄く立つてゐる。火形の相である。父はこの人を嫌つたこと甚しく、かつて云つた。「そりやきやうだいだから、おまへのおつかさんとは色んなところが似てゐたさ。けれどもその心情にいたつてはまさに雪と墨、しぐさや聲が似てゐるなりにその下等さ、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com